

## 『車椅子のヒーローの死』

10月10日、クリストファー・リーブさんが52歳という若さで亡くなりました。それまで、車椅子のヒーローとして活躍されていた彼のことを注目し、また色々な場で話をさせて頂いていただけに、この悲しいニュースはとてもショックであった。

クリストファー・リーブさんは、スーパーマンを演じた米ハリウッドの映画俳優である。その彼が、俳優として円熟期を迎えていた1995年、落馬事故で頸椎を損傷した。首から下の全身が麻痺に陥り、自ら手足を動かすことができないばかりか、呼吸でさえ自力ではできない状態となり、人工呼吸器が装着された。突然見舞われた不運に悲嘆の大きい彼は、一時は死まで考えたが、ご家族や多くの人々の支えにより、懸命なりハビリを続けて驚異的に回復していく。人工呼吸器を載せた車椅子で外出したり、両足の指と左手の指をわずかに動かすことができるようになったり、また1時間程度であれば人工呼吸器なしで自力で呼吸をすることができるようになった。

さらに彼は、クリストファー・リーブ財団を設立し、同じ障害を持つ人々のための治療や研究への支援を米政府に働きかけ、多くの人々を勇気づけていた。彼の闘病生活を含む半生は「車椅子のヒーロー（原題；Still Me）」という自伝に詳しく書かれている。そんな彼が「きっと歩けるようになる」という夢を果たすことなく、他界した。

事故に見舞われた時の衝撃はいかばかりであっただろう。端正な顔と屈強な肉体を持ち、何よりもハリウッドのスターであった彼が、ある日突然、不

幸のどん底に突き落とされたのである。自分のことを何一つできなくなり、呼吸すら自分の力だけではどうしようも無くなったと知った時、どんな気持ちであったのだろう。「こんな状態になって生きている自分は何なのだろうか」、「こうまでして生きている意味が無い」などと自問自答していたのではないのだろうか。



同じ言葉を、私たちはよくホスピスの現場でも耳にする。癌という厳しい現実を突きつけられ、病状の悪化とともに、少しずつ自分のことが自分できなくなり、ベッド上での生活となる。今までの元気であった自分と、人の手を借りなくてはならない自分とのギャップに苦しみ、その思いが先のような言葉として発せられるのである。

このような予期せぬ衝撃にみまわれた時、それをどのように自分の中で消化し、乗り越えていけばいいのだろうか。健康である私にはその術が分かるはずもない。それはもちろん、家族や友人、医療スタッフの支えがあったことだろうが、しかし何よりリーブさん自身が自らを奮い立たせて、この苦難を乗り越えていったに違いない。今まで築いてきた名声や富という殻を脱ぎ去り、一人の素のままの人間に戻った時、きっと彼の中で生きる意味が見えはじめ、勇気が湧きあがってきたのかもしれない。それは、普段、ついつい目先のことばかりにとらわれ、生活している私にとっては、衝撃であると

同時に、感動と尊敬に値するのである。リーブさんは私の心の中のヒーローであった。

リーブさんの自伝の中にこのようなことが書かれている。スーパーマンの映画が公開された当時、インタビューで「ヒーローとはなんですか」とよく質問されたそうだ。そんな時、彼は「先のことを考えずに勇気ある行動をとる人のことだ」と答えていた。しかし、その後、事故に遭い、苦難を乗り越えてきた時、その考えが変わった。「ヒーローとは、どんな障害にあっても努力を惜しまず、耐え抜く強さを身につけていった、ごくふつうの人のことだと思う」と。

リーブさんはスーパーマンという映画の中だけのヒーローではなく、確かに今ここにいる真のヒーローであった。そして、彼の言葉から、彼以外にも多くのヒーローが私たちの身近にいるのだ、ということも知った。そのヒーローたちは、一生懸命に生きていくことの意味や大切さを、私たちに教えてくれているのである。

